



TITLE:

# 複合動詞の意味拡張とその認知的 動機づけ：「v+こむ」を事例に

AUTHOR(S):

金, 光成

---

CITATION:

金, 光成. 複合動詞の意味拡張とその認知的動機づけ：「v+こむ」を事例に. 言語科学論集 2010, 16: 25-42

ISSUE DATE:

2010-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/141360>

RIGHT:

# 複合動詞の意味拡張とその認知的動機づけ

—「V+こむ」を事例に—

金 光成

京都大学大学院

letitbe621@yahoo.co.jp

## 1. はじめに

‘移動’や‘変化’は、私たちが毎日のように経験する出来事である。それゆえ、移動や変化と関連する言語表現が多く存在する。日本語複合動詞においても、基本的な移動と関わる「～こむ」と「～だす」がつく複合動詞の数が多く、また、その頻度が非常に高い。特に、複合動詞「V+こむ」は以下のように多様な空間への移動や状態への変化を表す。

- (1) a. 太郎はサッカーボールを部屋の中に持ち込んだ。  
b. 花子は太郎をその店に誘い込んだ。  
c. 2～3分おいてから美容液を塗り込んでください。  
d. 最初は、両ひざを抱え込んで座る。  
e. 相手の背後に回り込もう。  
f. 花子は生徒にルールを教え込んだ。  
g. 太郎は花子が詐欺師だと思い込んでいる。  
h. おじいさんは最近すっかり老け込んだ。  
i. その試合は、来週にもつれ込んだ。

複合動詞「V+こむ」は、移動や変化ではなく、(2) が例示するように「反復的にある行為を行う」という意味で用いられる場合もある。

- (2) a. さらにレベルアップを目指し、冬場は体を鍛え込んだ。  
(『朝日新聞』2002年3月30日、朝刊)  
b. 北京に向けフォームを改善し、泳ぎ込んだ。  
(『朝日新聞』2008年9月7日、朝刊)  
c. 曲のイメージをつかむため、ひたすら歌い込みました。  
(『朝日新聞』2007年10月29日、朝刊)

本稿では、以上のような後項動詞「～こむ」の意味拡張のプロセスとその動機付けを明

らかにすることを主な目的とする。

2. 先行研究とその問題点<sup>2</sup>

2.1 姫野 (1978, 1999)

姫野は、「V+こむ」の用法を大きく内部移動と程度進行に二分類している。まず、内部移動を表す表現は‘移動先の領域が有する形態の特徴’によって‘閉じた空間、固体、流動体、集合体または組織体、動く取り囲み体、自己の内部、その他’の7つに分けられるとしている。一方、程度進行を表す表現は‘前項動詞の意味特徴’によって‘固着化、濃密化、累積化’の3つに分けられるとしている。

2.2 松田 (2001ab, 2002, 2004)

姫野が「V+こむ」の用法の分類に重点を置いている反面、松田は認知意味論の観点から「～こむ」が有するスキーマ的な意味を（コア図式<sup>3</sup>を用いた）一つのモデルで捉えようとしている。一つのモデルで捉えることによって効率性を高め、その成果を教育に生かすことを目標としている。松田 (2004: 76) は「～こむ」の用法を以下のように4分類している。

表1 「～こむ」の用法の分類

二格を伴う「～こむ」		二格を伴わない「～こむ」	
A タイプ	B タイプ	C タイプ	D タイプ
V1は「内部移動」を含意しない	V1自体が「内部移動」を含意する	V1が示す状態への変化とその状態への固着	V1の反復行為により生じる状態変化（目標に向けて）
例) 飛びこむ, 呼びこむ	例) 入りこむ, 植えこむ	例) 冷えこむ, 眠りこむ	例) 十分に走りこむ

また、松田は「～こむ」のコア図式を用いることによって「～入れる」のような表現との差を示すと同時に、上で分類されたAからDタイプの表現を容易に捉えることができるとしている。

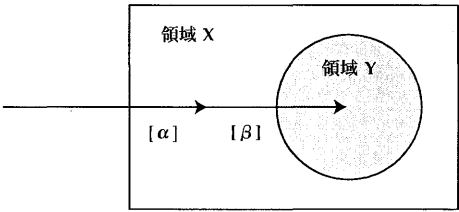


図1 「～こむ」のコア図式 (松田 2004: 75)

松田によると図 1 の矢印  $[\alpha]$  の部分は領域 X に入ることの意味的イメージを、矢印  $[\beta]$  の部分は領域 Y に入ることの意味的イメージをあらわしている。ここでいう領域 Y は‘難可逆的な領域<sup>4</sup>’を指すものである。コア図式は、ことばの具体的な意味ではなく、その根底にある意味的イメージであるとされている。以下では、具体的にコア図式が上で見た A～D タイプの説明にどのように活用されているのかを検討する。

### 1) A タイプ

■  $[\alpha]$  (=内部への移動) に焦点<sup>5</sup>のある A タイプの意味シフト (→は意味シフト<sup>6</sup>を表す)

- 例：
- ・ 飛びこむ、逃げてこむ、駆けこむ、運びこむ、投げこむ、流しこむ
  - どなりこむ、暴れてこむ、殴りこむ、踏みこむ
  - 呼びこむ、誘いこむ、引きこむ、引っぱり込む
  - 編みこむ、書きこむ、織りこむ、組みこむ、詠みこむ
  - 擦りこむ、塗りこむ
  - 折りこむ etc.

(3) 子供たちが、一斉にプールに飛びこんだ。

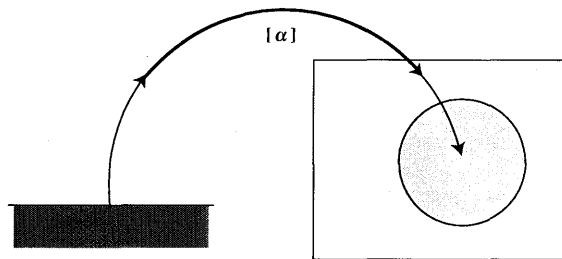


図 2 「飛びこむ」のイメージ図式 (ibid.: 164)

### 2) B タイプ

■  $[\beta]$  (=内部に留まる) に焦点のある B タイプの意味シフト

- 例：
- ・ 入りこむ、乗りこむ、もぐりこむ
  - 植えこむ、つめこむ、しまいこむ、埋めこむ
  - 包みこむ、くるみこむ
  - 住みこむ、泊まりこむ etc.

(4) 家人の留守に泥棒が入りこんだ。

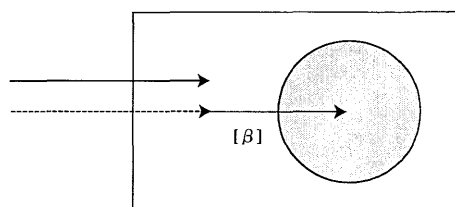


図3 「入りこむ」のイメージ図式 (ibid.: 175)<sup>7</sup>

3) C タイプ (姫野による「固着化」・「濃密化」); 領域 X が状態になる。

- 例：
- ・ 考えこむ, 眠りこむ, 寝こむ, 話しこむ, 座りこむ
  - ・ 冷えこむ, 老けこむ, 更けこむ, めかしこむ etc.

(5) 友達に久しぶりに会ったので、つつい話しこんじゃった。

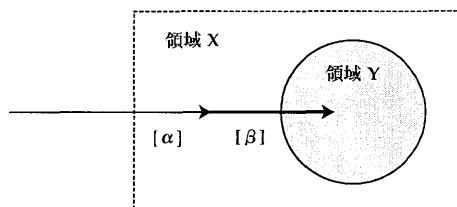


図4 Cタイプ「～こむ」のイメージ図式 (ibid.: 182)

4) D タイプ (「累積化」); 領域 X が満足できる状態になる。

- 例：
- ・ 走りこむ, 泳ぎこむ, 聞きこむ, 練りこむ, 煮こむ etc.

(6) マラソンに出場するため、毎日 100 キロ、走りこんでいる。

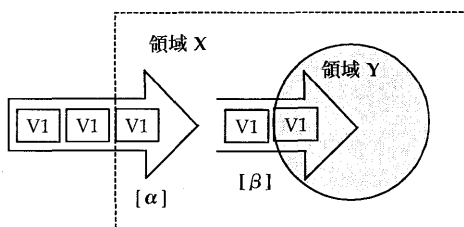


図5 Dタイプ「～こむ」のイメージ図式 (ibid.: 185)

## 2.3 先行研究の問題点

### 2.3.1 姫野 (1999)

(i) 「V+こむ」の用法を大きく内部移動と程度進行に二分類しているが、内部移動というカ

テゴリーと程度進行のカテゴリ間の関係性に関する検討がなされていない。

- (ii) ‘内部移動’ というカテゴリを二格の前に来る名詞句の性質によって 6 つの下位カテゴリに分けているが、その中で ‘閉じた空間’ が差す領域だけ抽象度が高く、他の下位カテゴリと関わっている領域とは質的な差が存在する。
- (iii) 程度進行というカテゴリに含まれる表現がどのような経験的基盤と関連していて、どのようなプロセスを通して現れるようになったかに関する検討がなされていない。

### 2.3.2 松田 (2004)

- (i) 松田は後項動詞「～こむ」のいわゆる ‘コア図式’ を提案している。領域 X と領域 Y を設定して領域 Y を「難可逆的な領域」としているが、どのような経験的基盤との関連でそのような領域の設定が支持されるのかに関する記述は見当たらない。認知意味論の枠組みからのアプローチであると主張しているからには、図式設定の認知的基盤が提示される必要がある。上で見た B・C・D タイプの表現の説明には領域 Y が不可欠である。もし、その設定の基準が恣意的なものであるなら、全体的な枠組みの見直しが求められる。
- (ii) 松田は、田中 (1990)、田中・松本 (1997)、国広 (1994) の研究を参照して、後項動詞「～こむ」のコア図式を提案している。コア図式は、特定の語が表しうるスキーマ的なイメージが全部描き出されたもので、文脈によって図式の中で焦点化される部分が違ってくるとされる。松田が提案する A タイプから C タイプまでの図式は、同じ構造を共有しており、焦点化される部分だけが異なる。しかし、D タイプの図式は、その構造自体が他の図式とは異なる。これは、コア図式の性格づけと矛盾する点である。松田は、D タイプが、A タイプと C タイプから派生された用法であると述べているだけで、それに対する論証は行われていない。
- (iii) A タイプと B タイプに属する表現の中では、‘意味シフト’ が起きていると主張している。例えば、前節で示したように、A タイプに属する表現は、5 つのサブタイプに分けられている。各サブタイプの表現は、[α] と [β] の部分の焦点化の度合いが微妙に異なることが示されており (cf. 松田 2001b)、それを意味シフトが起きている根拠としている。しかし、いわゆる ‘意味シフト’ のプロセスと、その動機づけ等に関する検討はなされていない。

### 3. 主体化からみた「V+こむ」の意味拡張

#### 3.1 主体化

認知主体が外部世界をどのように捉えて概念化していくのかに注目する認知言語学のアプローチでは自然に主体性<sup>8</sup> (cf. Langacker 1985, 1987, 2002, 2003) や主体化<sup>9</sup> (cf. Langacker 1990b, 1998, 1999, 2002, 2003, 2006) に関する研究が進められてきた。Langacker は主体化のプロセスを次のように性格づけている<sup>10</sup>。

An *objective* relationship fades away, leaving behind a *subjective* relationship that was originally immanent in it (i.e. inherent in its conceptualization).  
(Langacker 1998: 75)

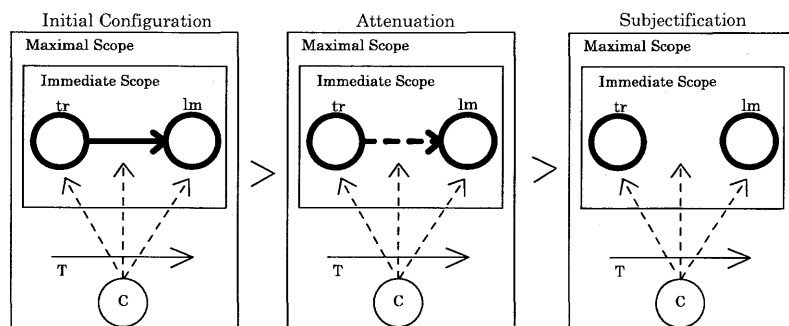


図6 主体化のプロセス (Langacker 1999: 298)

Langacker (1999: 301-302) は希薄化 (attenuation) と関わると思われる4つのパラメータを提示している<sup>11</sup>。

(7) Attenuation can be observed with respect to at least four parameters (the grouping is somewhat arbitrary).

- a. **Change in status:** from actual to potential, or from specific to generic.
- b. **Change in focus:** the extent to which particular elements stand out as focus of attention, notably in terms of profiling.
- c. **A shift in domain:** e.g. from a physical interaction to a social or experiential one, as in the evolution of modals.
- d. **Change in the locus of activity or potency:** from a focused onstage participant (the trajector) to an offstage one (the addressee), or from a specific mover to a non-specific, generalized one.

### 3.2 Langacker のパラメータに基づく分析

後項動詞「～こむ」の主体化には、〈焦点の希薄化〉、〈領域の希薄化〉、〈活動の源の希薄化〉が関わっている。以下は (1) の再掲である。

- (8) a. 太郎はサッカーボールを部屋の中に持ち込んだ。  
 b. 花子は太郎をその店に誘い込んだ。  
 c. 2～3分おいてから美容液を塗り込んでください。  
 d. 最初は、両ひざを抱え込んで座る。  
 e. 相手の背後に回り込もう。  
 f. 花子は生徒にルールを教え込んだ。  
 g. 太郎は花子が詐欺師だと思い込んでいる。  
 h. おじいさんは最近すっかり老け込んだ。  
 i. その試合は、来週にもつれ込んだ。

- 1) 焦点の希薄化：(h) と (i) の例では、活動の源（対象を変化させる主体）がステージ上のトラジェクターとしてプロファイルされていない。  
 2) 領域の希薄化：(a) から (e) の例は、物理的な領域における移動を表しているが、(f) の例は、教師と学生間の社会的な領域（具体的には、教育における情報伝達のプロセス）、(g) の例は、精神的な領域と関わっている。(h) の例は、物理的な領域を背景としているが、この場合、物理的な移動ではなく、変化と関係している。(i) の例は、試合に関連する領域を基に理解される<sup>12</sup>。  
 3) 活動あるいは潜在力の源の希薄化：(a) から (f) の例においては、活動の源は、意志性を有している動作主である。(g) の例では、動作主の意志性が薄れてきている。焦点化の希薄化のところで指摘したように、(h) と (i) の例では、潜在力の源がステージ上のトラジェクターとしてプロファイルされていない。(h) と (i) の活動の源は、特定しにくい（Langacker の言い方を借りれば）拡散した (diffuse) ものになっている。

しかし、これらのパラメータによる分析だけでは、漸進的な主体化のプロセスを適切に捉えることができない。例えば、(8a) から (8e) までの用例<sup>13</sup>は、主体化の性格づけに照らし合わせて検討してみると、主体化が起きているが、Langacker (1999) が提示している4つのパラメータだけでは、これらの用例間の差の分析ができない。次節では、その対案として〈状況レベルの意味〉と〈認知レベルの意味〉の観点を検討する。

### 3.3 状況レベルの意味と認知レベルの意味

山梨 (1993, 1995, 2000, 2004) は、人間と環境の相互作用を反映する言葉の身体性を考慮



し、日常言語の意味を〈状況レベルの意味〉と〈認知レベルの意味〉に区別している。前者は、外部世界の状況・事態の成立にかかわる意味のレベル（ないしは、与えられた状況・事態を規定する真理条件にかかわる意味のレベル）、後者は、与えられた状況・事態を主体が解釈し表現していく際の視点、パースペクティヴ等を反映する意味のレベルとして区別される。

表2 山梨 (1995: 6, 2000: 49)

A. 〈状況レベルの意味〉
(i) 記号化される前のレベル
(ii) 外部世界を直接に反映するレベル
B. 〈認知レベルの意味〉
(i) 視点、パースペクティヴを反映するレベル
(ii) 言葉のコード化に関わるレベル

金丸 (2004) でも指摘されているように、実際の言語表現を観察してみると、状況の意味が共通しているが、認知的意味が異なる場合 (例文 (9)) と、逆に、認知的意味が共通している<sup>14</sup>が、状況的な意味が異なる場合 (例文 (10)) が存在する。つまり、状況の意味と認知的意味の両方を観察記述することが必要なのである。状況の意味と認知的意味は、意味の観察記述においては便宜的に区別することができるが、本来は両者が相互作用する総体として捉えられる必要がある。

- (9) a. ワインがまだ半分ある。  
       b. ワインがもう半分しかない。
- (10) a. Vanessa jumped across the table.  
       b. Vanessa is sitting across the table from Veronica. (Langacker 1990b: 17)

認知主体は、自身を取り囲んでいる環境の中で、その環境に働きかけたり、環境から影響されたりしながら、毎日の生活を営んでいる。そのため、私たちが用いる言語の意味には、状況レベルの意味と認知レベルの意味の両側面が反映されていると考えられる。したがって、一方のレベルの意味だけに焦点を当てた分析ではなく、状況レベルの意味と認知レベルの意味の両側面を考慮にいたした分析が求められる。また、両側面を総体的に検討していくことによって、主体化がどのような形で起きているのかが観察できると思われる。

さらに、状況レベルの意味を細かく検討していくために、移動体、そして、移動体と容器間の関係性が、感覚モダリティ的に認知主体によってどのように捉えられるのかに注目する必要がある。これは、感覚モダリティ的な側面を検討することによって、移動体や移動体と容器間の関係の具体性の度合いをよりの確に捉えていくことができると思われるからである<sup>15</sup>。

### 3.4 「～こむ」と関わっている経験的基盤

本稿では、「V+こむ」の意味拡張のプロセスに焦点を置いているので、その意味的特性に関する具体的な検討は行わないが、「～こむ」が有する意味的特性と関わっている経験的基盤を簡単に検討しておく。認知言語学では、基本的に、私たちが有する概念構造は身体性を反映するものであると考える。また、意味構造はその概念構造を基盤とすると見る。Evans and Green (2006) は、このような主張を主に Johnson (1987) と Talmy (2000) の研究を参照して図 7 のように表している。このような言語観・世界観を持っているため、認知言語学の研究プログラムにおいては、人間の経験的基盤や事態把握の仕方がどのような形で言語表現に反映されているかを明らかにしていくことが中心的な課題になっている。

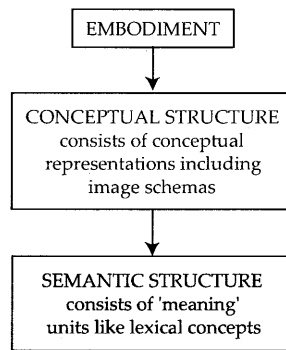


図 7 From embodiment to linguistic meaning (*ibid.*: 177)

2 節で検討したように認知意味論の観点を取っているとする松田 (2004, etc.) の研究を含む先行研究においては、「～こむ」の意味と関わっている身体的・経験的基盤に関する検討がなされていない<sup>16</sup>。本節では、「～こむ」と関わっている身体的・経験的動機づけを 3 つの側面から短く検討する。

- (i) 「～こむ」は、動的に形成される容器の内部への移動を表すことができる。Dewell (2005) も指摘しているように、私たちが経験する容器のパターンは連続体を成していると言えるので、「～こむ」だけが動的に形成される容器を移動先として取るとは言いがたいが、「握りこむ」、「抱え込む」、「挟み込む」<sup>17</sup>と関連する容器のように、容器としての性質を内在的に有していないものを移動先として取るのは、「～こむ」だけである。



図 8 Active ENCLOSING (*ibid.*: 380)

(ii) 「～こむ」は、〈容器 (container)〉と〈中心－周辺 (center-periphery)〉のイメージスキーマと関わっている。Johnson (1987: 125) 指摘しているように、〈中心－周辺〉のイメージスキーマには、〈容器〉のイメージスキーマがよく重ねあわされる (superimposed)。認知主体は、常に何がより中心的 (inner) で何がより周辺の (outer) かを主観的に判断している。後項動詞「～こむ」は「～いれる」に比べて、容器の中でもより中心的なところへ移動していくことをスキーマ的に表す表現であると考えられる。

(iii) このような言語表現の基盤になるイメージ形成やイメージスキーマの形成には社会・文化的な視点が反映されるという点も看過してはいけな (cf. 山梨 2000: 157-158, Johnson 1987, Gibbs 2005, Langacker 2006)。例えば、韓国語にも「～いれる」や「～こむ」に類似する後項動詞があるが、その意味拡張は異なる。

#### 4. 意味変化における再分析の役割

複合動詞「V+こむ」の中には、以下のように主体化の観点からは捉えられない表現がある。

- (11) a. さらにレベルアップを目指し、冬場は体を鍛え込んだ。  
 (『朝日新聞』2002年3月30日、朝刊)
- b. 生徒たちは、顔が映り込むほど講堂の床を磨き込んだ。  
 (『朝日新聞』2005年2月26日、朝刊)
- c. 曲のイメージをつかむため、ひたすら歌い込みました。  
 (『朝日新聞』2007年10月29日、朝刊)
- d. 北京に向けフォームを改善し、泳ぎ込んだ。  
 (『朝日新聞』2008年9月7日、朝刊)

(11) で用いられている複合動詞「V+こむ」は、‘(目標とする状態に到達するために) 反復的にVの行為を行う’ という意味 (以下では、‘反復の意味’ と呼ぶ) を表している。先行研究 (cf. 姫野 1999, 松田 2004) では、‘反復の意味’ の獲得のプロセスとその動機づけが検討されていない。本節では、(11) のような例がどのようなプロセスを通して現れるようになったかについて簡単に分析しておく。

##### 4.1 反復の意味の獲得と再分析

反復の意味を有する新しい構文スキーマが形成され、用いられるようになったのは19世紀に入ってからである。表3で括弧の中に入っている例は、新しい意味が定着する前の段階の例として挙げたものである。

表 3 反復の意味を表す「V+こむ」の出現

18C	(教え込む、覚え込む、習い込む、勧め込む)
19C	(頼み込む) 聞き込む、鍛え込む、磨き込む、拭き込む、使い込む
20C	読み込む、書き込む、投げ込む、走り込む、泳ぎ込む、歌い込む、洗い込む、食べ込む、歩き込む等

結論を先取りして述べると、本研究では、(12) で例示するように、元々内部への移動の意味だけを表していた「V+こむ」が、(12b) のように内部への移動の意味としても、反復の意味としても解釈できる中間段階を経て、反復の意味を有する新しい構文スキーマが抽出されるようになったと主張する。

- (12) a. 太郎は干してあった洗濯物を部屋の中に取り込んだ。  
 b. 太郎は生徒に基本的なルールを教え込んだ。  
 c. 花子は試合に備え、泳ぎ込んだ。

反復の意味を表す「V+こむ」の例(「泳ぎ込む」等)は、反復の意味と関わる構文スキーマが定着する前段階の例(「教え込む」等)とは、以下のような違いが見られる。

- (i) 反復の意味の取り消しができない。  
 (ii) 内部への移動が中心的な意味ではない。  
 (iii) 前段階の例のように、「～こむ」が前項動詞と結合することによって、十分な V の行為の必要性が(文脈に応じて)喚起されるようになったとは考えにくい。つまり、[[V+こむ]/[(目標とする状態に到達するために) 反復的に V の行為を行う]] の構文スキーマからの事例化である。

反復の意味を有する「V+こむ」の構文スキーマの獲得は、次のような状況と関係していると考えられる。

- (13) a. ((太郎は {生徒} に {基本的なルール} を教え込んだ) / (太郎は {基本的なルール} を {生徒} が習得できるように教えた))  
 b. ((太郎は {生徒} に {基本的なルール} を教え込んだ) / (太郎は {基本的なルール} を {生徒} に何度も繰り返し教えた))  
 (14) a. (({花子} は {基本的なルール} を覚え込んだ) / ({花子} は {基本的なルール} を習得するまで覚えた))  
 b. (({花子} は {基本的なルール} を覚え込んだ) / ({花子} は {基本的なルール} を何度も繰り返し覚えた))

(13a) と (14a) は、話し手の発話と意図を表わしていて、「習得できるように」/「習得するまで」は「～こむ」の内部への移動の意味と関わっている。そして、(13b) と (14b) は、聞き手が聞く発話とそれに対する聞き手の解釈を表している。ここで「何度も繰り返し」は、話し手の意図からずれた聞き手の解釈で、言語形式の「～こむ」に対応する。

このように、「反復の意味」はオンラインコミュニケーションにおいての話し手の意図と聞き手<sup>18</sup>の理解のズレ（あるいはオフライン上での聞き手の二次的な解釈）が頻繁に起きることから生じたと言える。そしてこのことが原因となって後項動詞「～こむ」に新しい意味、反復の意味が与えられるようになったと思われる。

Queller (2008) は、話し手の意図とずれる聞き手の解釈 (extracompositional gestalt utterance meaning) が頻繁に起こることによって、その解釈がそれと密接に関わっている言語形式の意味として再分析されていくプロセスのことを‘意味的逆形成 (semantic backformation)’と名付けている。Queller は、(15) でも例示されているように、「(all) over」には Brugman (1981) や Lakoff (1987) がいう“multiplex covering”には含まれない“chaotic dispersal”の意味があり、その新しい意味は、(16b) でのような中間段階を経て獲得されるようになったと主張している<sup>19</sup>。

(15) a. There are crumbs (/ \*? tiles) all over the floor.

b. You've got chocolate (/ \*? skin) all over your face.

c. This tablecloth has bloodstains (/ \*? red and white squares) all over it.

(Queller 2008: 271, underline added)

(16) a. She poured syrup over the pancakes.

b. She sprinkled water over the plants.

c. She scattered seeds over the field.

(Dewell 1994: 373, underline added)

#### 4.2 「内部への移動」と「目的性」

では、「V+こむ」の新しい構文スキーマ（[ [V+こむ] / [ (目標とする状態に到達するために) 反復的に V の行為を行う] ]）の中で、目的性（‘目標とする状態に到達するために’の部分）は、どこに由来するものとして理解するべきであろうか。表 3 における中間段階の例（「教え込む」、「覚え込む」、「習い込む」、「勧め込む」、「頼み込む」など）を観察してみるとわかるように、前景化されていないものの、これらの表現も何らかの目的性と関係している。そのような目的性が、再分析を通して得られた‘反復的に V の行為を行う’の意味によって、前景化されるようになったと考えられる。

ここで、反復の意味が獲得される前と後の「内部への移動」の意味と「目的性」との関連性について検討してみよう。中間段階の例においては、「内部への移動」とその移動が意図している目的は一致している。例えば、「花子は太郎に基本的なルールを教え込んだ」の例だと、移動先（太郎）の内部ヘルールに関する知識を伝達することが（花子の）目的である。



- d. センターの勉強法で1番いいのは、短期間により多くの問題を解き込むことです。  
(<http://questionbox.jp.msn.com/qa1003898.html>)

さらに、「やり込む」の場合は、目的性が薄れてきている。

- (19) a. 「遊戯王」人気で定着した感のあるカードゲーム。中でも子どもと一緒にハマる父親が目立つのが「デュエル・マスターズ」(タカラトミー)だ。実は私もその一人で、やり込むほどに奥の深さに驚いている。

(『朝日新聞』2007年11月3日、朝刊)

- b. 最近はプレーする時間がなかなかなくて、ごぶさたしているけれど、長い間、TVゲーム機やゲーム・ソフトに関してはオタクとっていいくらいやり込んでいた。

(『朝日新聞』2009年4月4日、朝刊)

## 5. まとめ

本稿では、複合動詞「V+こむ」の意味拡張のプロセスを主体化と再分析の観点から捉えることができるという点を示した。3節では Langacker が提示している主体化のパラメータだけでは「～こむ」の多義を捉えきれないという点を指摘し、その対案を提示した。4節では「反復の意味」の獲得の動機づけとそのプロセスを示すことを試みた。特に、言語使用の場で起こっている話し手の意図と聞き手の理解のズレが、新しい意味獲得を動機づける重要な要因の一つになりうるという点を指摘した。さらに、反復の意味を持つ新しい表現(「踊り込む」、「解き込む」など)を観察することによって、ネイティブの話者が反復の意味の構文スキーマを有しており、必要に応じて活用していることを確認した。

## 注

1. 浅尾 (2007) では『CD-毎日新聞'95 データ集』の本文を対象に複合動詞の生産性の検証がなされている。その結果によるとトークンの数、つまり頻度が一番高いのが「～込む」(14,654) で二番目に高いのは「～出す」(11,841) であった。
2. 影山 (1993, 1996) は、「～こむ」が [Event BECOME [y BE IN z]] の語彙概念構造を、由本 (2005) は、「～こむ」が [[x] GO [TO [IN [y]]]] の語彙概念構造を有しているとする。語彙意味論では、スキーマ的な概念構造や、それによって動機づけられるとする同定・合成のプロセスが注目されているが、後項動詞「～こむ」が表しうる意味間の関係性や、意味拡張のプロセス、また、それを動機づける経験的基盤などは、今のところ、研究の対象とされていない。
3. 松田 (2001b: 223, 2004: 190) では「～こむ」のコア・スキーマ(=「～こむ」のすべての用法を包括する意味的イメージ)をあらわしたものを「～こむ」のコア図式であるとしている。松田 (2004: 68) では「コア」という用語の定義を田中 (1990) に従って以下のように表している。

‘コアは語の意味の全体を見渡すことのできる円錐形の頂点のようなものをあらわす概念であり、典型、非典型を問わずすべての用例の背後にある抽象的な概念である’

ちなみに、*粉山* (2001: 49-52) では田中 (1990) がコアという概念を、あるところでは最大公約数的なものとして、あるところではすべての用法を包括するものとして説明しているという矛盾点を指摘している。しかし、松田はすべての用法を包括できるものとして、一貫してコアという用語を用いているので問題にはならないと思われる。

4. 松田 (2004: 75) では「難可逆的な領域」を‘主観的に、領域 X の外に出るのが困難だと感じられる領域であり、物理的に領域 Y が存在するわけではない’と述べている。広辞苑第四版の「こむ」(籠む、込む)の語義をコア図式設定の根拠としている。語義は、自動詞としては「内部へ内部へとものごとが入り組んで密度が高まること」、他動詞としては「まわりを囲んだ中に何かを入れて動かさないようにすること」である。
5. 松田は、田中 (1990)、田中・松本 (1997)、国広 (1994) の研究を参照し、彼らが用いている意味で‘焦点化’という用語を使っている。
6. 松田が提示する A タイプから D タイプのいわばイメージ図式は「～こむ」のコア図式から拡張された形である。各タイプの動詞は各タイプのコア図式に基づいて説明される。同じタイプに分類されている動詞同士でも [α] と [β] の部分の焦点化の微妙な差によって異なるイメージ図式を有するという点で、下位分類を行っている。一番上に位置づけられるグループがそのタイプの中でもっともプロトタイプの動詞類で、一番下の例が非プロトタイプの動詞類である。同じタイプ内の動詞間の焦点化の度合の差を‘意味シフト’という用語を用いて指している。ちなみに、松田 (2001b: 227) では、明確な意味シフトは A・B タイプだけであらわれるとしている。
7. この図は、動詞「入る」と「～こむ」のイメージ図式を重ね合わせたものである。このように表示したのは、B タイプの「～こむ」のイメージ図式では、[α] の部分が焦点化されていないというところを表しているとして理解される。
8. “subjectivity pertains to the observer role in viewing situations where the observer/observed asymmetry is maximized.” (Langacker 1985: 109)
9. 深田 (2001)、深田・仲本 (2008) では、Langacker の言う“subjectification”は、厳密には、事態の中に入り込んでその事態を解釈していく主体の認知プロセスを表わすようになるという意味での「主体化」と、それを介して構築される主体の主観を表わすようになるという意味での「主観化」の両方を含んでいると指摘している。
10. Langacker (2008: 535-539) では、シミュレーションと主体化の関係性について述べられているが、その中で、Langacker は主体化を次のように叙述している。  
 “... subjectification: mental operations immanent in the archetypal conception come to be used in abstraction from its content and applied to other circumstances.”
11. 深田・仲本 (2008: 175) では、主体化される可能性がある側面として、少なくとも、(i) 参照点、(ii) 移動、(iii) 力、(iv) コントロール関係の4つが認められるとしている。
12. (8f)～(8i) の例は、抽象的な領域を基にしているという点で、領域の希薄化が起きていると考えられるが、その順序が (8f) から (8i) になったのは、‘活動あるいは潜在力の源の希薄化 (change in the locus of activity or potency)’と関わっていると考えられる。
13. (8a) は [容器 (bounded) の内部への移動]、(8b) は [誘導]、(8c) は [融合・結合]、(8d) は [動的包含]、(8e) は [容器 (unbounded) の内部への移動] と関わっている。
14. ここで認知的意味が共通しているというのは、ともにテーブルの上を視線が横断する心的走査 (mental scanning) のプロセスが関わっているという意味である。



15. 紙面の関係上、具体的な分析は、金 (2010) を参照されたい。
16. 言語表現と関わっている身体的・経験的基盤の検討を軽視・無視していくとそのリサーチが認知言語学の観点を取っていると主張するとしても、CAUSE, BECOME, BE 等の概念のプリミティブの記号の構造関係にもとづいて(動詞の)意味構造を規定していく語彙意味論のようなアプローチと根本的に変わりはなくなってしまう。概念構造は宙に浮いているものではなく、人間が自身を取り巻く環境の中で相互作用を通して獲得する産物なのである。
17. 他の例としては、丸めこむ、抱きこむ、抱えこむ、くるみこむ、囲みこむ、巻きこむ、挟みこむ、くわえこむ、頬張りこむ、覆いこむ等がある。
18. ここでの‘聞き手’は、話し手をも含む、広い意味での解釈者を指すものとする。話し手は、言語表現を通して伝えようとする一次的な意味以外に、二次・三次的に(間接的に)伝えようとする含意があるケースは少なくない。また、話し手が自身の発話に対して、後から新たな解釈を与えることもできるだろう。
19. Queller の研究は、誘導された推論 (invited inference) が一般化される際、意味変化が起こると主張している点で Traugott and Dasher (2002) の研究と軸を一にしている。
20. しかし、依然として、後項動詞「～こむ」には、ある空間の内部への移動と関わる意味があるので、意識的であれ、無意識的であれ、内部への移動の意味は想起される。というのは、例えば、「泳ぎ込む」だと‘反復の意味’を表す構文から事例化された表現であるため、「反復的に泳ぐ(トレーニングをする)」の意味を表す表現としても理解されると同時に、分析的に理解される可能性もあるので、「泳いだる空間の内部に移動する」という意味を表す表現としても、無意識的であれ、理解される可能性は十分ある。

#### 参考文献

- 浅尾仁彦. 2007. 「複合語の生産性と文法的性質」『日本言語学会第 134 回大会予稿集』416-421.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』東京: ひつじ書房.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点』東京: くろしお出版.
- 金丸敏幸. 2004. 「言語の主體的側面に関する認知言語学的アプローチ」『認知言語学論文集』4: 221-231.
- 菊田千春. 2008. 「複合動詞「V かかる」「V かける」の文法化」『同志社大学英語英文学研究 81・82 合併号』115-165. 同志社大学人文学会.
- 金 光成. 2010. 「日本語複合動詞に関する認知言語学的考察」京都大学 人間・環境学研究科, 修士論文.
- 国広哲弥. 1994. 「認知的多義—現象素の提唱」『言語研究』106: 23-43.
- 田中茂範. 1990. 『認知意味論—英語動詞の多義の構造』東京: 三友社出版.
- 田中茂範・松本曜. 1997. 『空間と移動の表現』日英比較選書 6. 東京: 研究者出版.
- 姫野昌子. 1978. 「複合動詞『～こむ』、および内部移動を表す複合動詞類」『日本語学校論集』5: 47-70. 東京外国語大学.
- 姫野昌子. 1999. 『複合動詞の構造と意味用法』東京: ひつじ書房.
- 深田智. 2001. 「“Subjectification”とは何か」『言語科学論集』(京都大学大学院人間・環境学

研究科) 7: 61-89. 京都大学.

深田智・仲本康一郎. 2008. 『概念化と意味の世界』山梨正明(編) 講座 認知言語学のフロンティア 3. 東京: 研究社.

松田文子. 2001a. 「コア図式を用いた複合動詞後項『～こむ』の認知意味論的説明」『日本語教育』111: 16-25.

松田文子. 2001b. 「複合動詞後項『～こむ』の意味」『人間文化論叢』4: 223-235. お茶の水女子大学.

松田文子. 2002. 「複合動詞研究の概観とその展望—日本語教育の視点からの考察」『言語文化と日本語教育 5 月特集号 第二言語習得・教育の最前線—あすの日本語教育の道しるべ』日本言語文化研究会. 170-183.

松田文子. 2004. 『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して』東京: ひつじ書房.

松本曜. 2009. 「複合動詞「～こむ」「～去る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」『語彙の意味と文法』175-194. 由本陽子・岸本秀樹(編) 東京: くろしお出版.

棚山洋介. 2001. 「多義語の複数の意味を総括するモデルと比喩」山梨正明(編) 『認知言語学論考』1: 29-58. ひつじ書房.

山梨正明. 1993. 「認知言語学—ことばと心のプロセス」『日本語要説』235-261. 東京: ひつじ書房.

山梨正明. 1995. 『認知文法論』東京: ひつじ書房.

山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』東京: くろしお出版.

山梨正明. 2004. 『ことばの認知空間』東京: 研究社.

由本陽子. 2005. 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』東京: ひつじ書房.

Brugman. 1988. *The Story of Over: Polysemy, Semantics and the Structure of the Lexicon*. New York: Garland.

Dewell, Robert B. 1994. "Over again: Image-schema transformations in semantic analysis." *Cognitive Linguistics* 5: 361-380.

Dewell, Robert B. 2005. "Dynamic patterns of CONTAINMENT." In Beate Hampe and Joseph E. Grady (eds.), *From Perception to Meaning*, 369-394. Berlin: Mouton de Gruyter.

Evans, Vyvyan and Melanie Green. 2006. *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Gibbs, Raymond. 2005. "The psychological status of image schema." In Beate Hampe and Joseph E. Grady (eds.), *From Perception to Meaning*, 113-136. Berlin: Mouton de Gruyter.

Johnson, Mark. 1987. *The Body in the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.

- Langacker, Ronald W. 1985. "Observations and speculations on subjectivity." In John Haiman (ed.), *Iconicity in syntax*, 109-150. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.1. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1990a. *Concept, Image, and Symbol*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1990b. "Subjectification." *Cognitive Linguistics* 1(1): 5-38.
- Langacker, Ronald W. 1998. "On Subjectification and Grammaticization." In J-P Koenig (ed.), *Discourse and Cognition: Bridging the Gap*, 71-89. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2000. "A dynamic usage-based model." In Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage-based models of language*, 1-63. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. 2002. "Deixis and Subjectivity." In Frank Brisard (ed.), *Grounding: The Epistemic Footing of Deixis and Reference*, 1-38. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2003. "Extreme Subjectification: English Tense and Modals." In Hubert Cuyckens, Thomas Berg, René Dirven and Klaus-Uwe Panther (eds.), *Motivation in Language*, 3-26. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Langacker, Ronald W. 2006. "Subjectification, Grammaticization, and Conceptual Archetypes." In Canakis, Costas and Bert Cornillie (eds.), *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*, 17-40. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Queller, Kurt. 2008. "Toward a socially situated, functionally embodied lexical semantics." In Roslyn M. Frank, René Dirven, and Tom Ziemke (eds.), *Body, Language and Mind*, 265-300. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a cognitive semantics* Vol. 1: *Concept structuring systems*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Traugott, Elizabeth Closs and Richard B. Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.

## 辞典

- 『日本国語大辞典』第二版. 2000. 東京: 小学館.
- 『時代別国語大辞典』上代編. 1967. 東京: 三省堂.
- 『時代別国語大辞典』室町編 (第一巻～第五巻) 1985～2000. 東京: 三省堂.